

国民化される「内部の自然」－
「赤いウィーン」市政下の自然の友による受容と抵抗
Being Nationalized "Inner Nature":
Acceptance and Resistance by the Friends of Nature in
"Red Vienna"

古川 高子
Takako FURUKAWA

東京外国語大学世界言語社会教育センター
Center for Global Language and Society in Higher Education,
Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 青年ヴァンデルン推進策にみる自然の友の葛藤
 - 1.1. 心身を癒す登山から身体・衛生管理のヴァンデルンへ
 - 1.2. 青年ヴァンデルンの本格化
 - 1.3. 「自然による啓蒙」のための青年ヴァンデルン
2. 「赤いウィーン」における身体・衛生政策の自然の友による受容
 - 2.1. 身体衛生管理
 - 2.2. 女性による登山
 - 2.3. 「国民の身体」を形成する女性—国民・階級への貢献
3. 自然の友の禁酒問題—身体への介入に対する男性登山家による抵抗
 - 3.1. 飲酒から節酒へ
 - 3.2. 政治的急進派の青年たちに対する抵抗：私的領域である身体の確保

おわりに

キーワード：「赤いウィーン」 青年ヴァンデルン 身体衛生管理 女性登山 禁酒

Keywords: "Red Vienna", Wander for Youth, Health Management, Women's Climbing,
Abstinence from Drinking



【要旨】

本稿は、オーストリア社会民主党が市政を執った戦間期の「赤いウィーン」における身体衛生・スポーツ政策に対して、独自のヴァンデルン（＝山歩き）を世紀転換期から維持してきた同党の登山家協会自然の友が示した同意・不同意の態度を検討し、彼らがいかなる時にブルジョワ登山家協会から学んだリベラルな思想を提示して、党の国民化の方針に抵抗したのか明らかにするものである。党は戦争で疲弊・減少した人口を再生産力の増進と健康管理・身体運動を行うことで回復させ、社会主義的思想に同意する国民を育成することを目的にしていた。そして、その手段の一つとして自然の友が推進してきたヴァンデルンを利用しようとしたのである。自然の友も基本的にその方針に同意し、協力したものの、急進的に左傾化した青年たちに対しては従来の自然科学学習を伴うヴァンデルンをもって啓蒙しようとした。また、登山家協会の慣習であり、男性登山家の身体への介入となる禁酒強制に対しては抵抗する一方で、女性の国民化については反対しなかった。それは自然の友が専ら男性からなる後継登山家の育成という点から国民化を捉えていたからであり、また、女性を国民の枠組から排除する男性有産市民中心のリベラルな階層社会の思想を維持していたからでもあった。

This paper investigates how the climbing association for workers of the Social Democratic Party in "Red Vienna", the Friends of Nature, had maintained their original wandering activities through nature since fin-de-siècle, and reacted against the health managements by the party in the interwar period. And it would be clarified when the association showed their liberal thoughts that had been influenced through bourgeois alpine associations, and resisted the course of the health management policy by the party that managed to nationalize the population. The party regarded mountain climbing and wander just as the means to recover the population that had been reduced in the lost WWI and to build a socialist nation. The Friends of Nature almost agreed with the party's policy and co-worked, but tried to enlighten the young radical-left by using the liberal methods of studying through nature, when they were confronted with the too much politicized youth. Moreover, they resisted such compulsory abstinence from drinking as the youth strongly insisted on, because they regarded it as interfering in individual private sphere, i.e. male mountain-climber's body, and besides, drinking was the custom of mountain climbing associations. The Friends of Nature, however, agreed the nationalizing policy for women, because they had less interests in the female health management than in the young male's one. They only wanted to nationalize young tough men in order to get their successors of mountain climbers. This proves that the socialist mountaineers had even in the interwar era an exclusive thought of liberals, since they had accepted it at the end of the 19th century.

はじめに

戦間期オーストリアの首都ウィーンは、第一次世界大戦敗戦直後に市政を執って以来、1934年2月に連邦政府との内戦で敗北するまで社会民主党が統治していた。この自治体政府が解決しなければならなかった最も重要な課題の一つは、崩壊したハプスブルク二重君主国の「残部」に創られたオーストリアにおいて社会主義的思想に同意する新しい「国民」を育成することであった。ウィーン市はその実現に向けて当時の最先端科学であった社会ダーウィニズムと新ラマルク主義を学び、人間を「有機資本」とみなして合理的に管理すべきだと唱えたゴルトシュタイト (Rudolf Goldscheid: 1870-1931) の思想からも影響を受けたタンドラー (Julius Tandler: 1869-1936) を市の福祉社会衛生管理官として起用した。タンドラーは予防政策を重視し、節制・節酒による生活改善を行い、青年時に身体を鍛えることで老人になってからの福祉費用を減らすことができるとの考えを有していた。社会民主党の住宅政策も相まって労働者を清潔な環境に住ませ、適度な運動と栄養を摂取して生活を改善し、健全な身体を獲得・維持することにより健康で優良な人口を再生産・育成し、国民的安定を得ようとしたのである。社会民主党書記であり労働者向け登山家協会自然の友の第三代目会長でもあったリヒター (Paul Richter: 1877-1958) は、1932年、登山時に利用する避難小屋 (以下小屋と略記) 建設を公的機関が行うことで登山やヴァンデルン (=山歩き) が促進され、青年たちの健康が増進されれば福祉費用の節約になる、と協会大会で述べていた。タンドラーの思想を受容してそれを登山家協会で実践しようとしていたのである。自然の友は、こうして戦間期「赤いウィーン」の健康政策を担う存在になっていく [古川 2018b]。

自然の友協会は、1895年、一人の小学校教師シュミードル (Georg Schmiendl: 1855-1929) の発案によって設立された。彼は社会民主党員であり、党首のヴィクトル・アドラー (Victor Adler: 1852-1918) の友人でもあったが、同時に修正自由主義を元に社会問題の解決を唱える急進的左派リベラルのブルジョワ層からなる社会改革的協会の創設にも関与し、労働者階級の貧困や健康を改善するために積極的に活躍していた。世紀転換期のウィーンは第二次産業革命の最中であり、農山村からの急速な人口移動に伴う住宅不足に苦しみ、劣悪な衛生状態にあった。周りを山に囲まれ湿気が強く、労働者は換気の悪い職住環境で生活せざるを得なかったため、当時、結核が「ウィーン病」と呼ばれるほど広がっていた。この状況を改善しようとシュミードルは自然の友の設立を思い立ったのである。教育者でもあった彼は啓蒙を重視し、労働者が余暇を飲酒やカード遊びで過ごすのではなく、遠足や登山を通じて心身を強靱にし、自然に触れて自然美を知り、人間の品性を高めることを希求した。彼の思想は協会全体で共有され、1901年時の執行委員会においても「ものを考える力を失わせてしまう居酒屋の代わりに、山や森の香しく純粋な空気を吸って余暇を過ごし、労働の疲れや心配事を癒やすこと」という指針が確

認され、会費を上げずに、より広く「ものを作る人びとSchaffendes Volk」を勧誘することが唱えられていた [NF 1901: 111-112; 古川 2008] ²⁾。

自然の友は労働者の健康改善を目的にヴァンデルンや登山を行う過程で自然の諸現象や原理から学んで現存社会で人間が生きる際に役立てるという「自然による啓蒙」の方針を戦間期まで維持した。ところが、1925年半ば、このヴァンデルンを思想と活動面から支えていた修正自由主義思想の中でも最急進派に属する理科教師カラロ (Angelo Cararro: 1862~?) を退け、自然環境を「外部の自然」、人間を「内部の自然」とみて、前者をもつば後者のために役立てようとする環境決定論を強く押し出す思想を主張するようになった。いわば、修正自由主義的思想から「赤いウィーン」の思想を受け入れ優生学的発想を強めて、将来の社会主義社会とそれを担う国民形成のために健全な心身をもった人々を育成するという未来志向の見解を協会誌に採用するようになったのである [古川 2018b; Sandner 1999]。

この思想的な変化に比して、身体育成や健康管理について戦間期自然の友はどのように対応するのかを問うのが本稿である。「赤いウィーン」の下で飲酒の代わりにヴァンデルンや登山をすることで健全な心身を求めようとしていた自然の友は、女性に対しては党による国民化の方策に賛成する一方で、青年政策においては急進化した青年たちをリベラルな「自然による啓蒙」を利用して押さえ、さらに禁酒政策をもって男性登山家の身体に介入しようとする急進的青年の態度に対しては、個々人の自立性や自由を主張して反対した。いわば、国民化の流れをある部分では受容し、別の面ではリベラルな思想や方針で抵抗しようとしたといえる。

従来、「赤いウィーン」に関する諸研究においては、世紀転換期に出現した「国民社会」形成のための大衆政治運動が自治体レベルで体制化して戦間期のウィーン市政を形作り、労働者の生活世界への介入がなされた結果、「生活世界の植民地化」 [Harbermas 1990: 40; ハーバーマス 2000: 20-21] が生じたとみなされてきた。戦間期の政治社会が次の全体主義体制を準備したと主張されたのである。これに対して、戦間期から第2次世界大戦中にかけて、むしろ戦後の消費主義、私的領域への退却といった民衆行動の土台が作られたとみなす立場から、この時期の民衆は全体主義的支配に従順になったのではなく、非行為 (退却)、回避、冷淡さといった政治的行爲 political agency を学んで、それを実行していたという見方がでてきた [Zahra 2010]。身体に関しては、戦間期ウィーン市当局は保健・衛生等の様々な領域において住民の身体や家庭への介入や規律化を行った、とする研究が通説であったが [Byer 1987; 1988]、2000年代に入ると、当時の政策は個々人の意志を汲んでおり、強制的なものではなかったとする研究が出現した。そして、カトリック側の性に関する議論と社会民主党のそれとの共通点を挙げることで優生学的発想が社会民主党陣営だけではなく、より広く浸透していたことが指摘され、この点からも「赤いウィーン」のみによる強制的介入という言説が否定されるようになった [McEwen

2010; 2012; Mesner 2007]。また、同市の政策が個人を重視するものであったことは、労働運動史のコンラートによっても言及されている。世紀転換期にあった様々なリベラルな思想潮流を引き受けた社会民主主義が、キリスト教社会党の社会政策と結合することによって「赤いウィーン」において開花したという [Konrad 2008]。さらに、この時期に発展した社会民主党系女性運動に対しては男性党員が保守的思想や態度を固持したことが突き止められている [Bader-Zaar 1996]。つまり、戦間期には一方では個人の意志を尊重する市の政策を背景に、個人の自由が重視され、他方では父権主義的で保守的な思想がまかり通り、それらが国民化する社会の中で同時に存在したばかりではなく、一般民衆も受容していた可能性が示唆されたのである。

このような状況や自然の友協会の意識にも見いだせる矛盾した状況を理解するには、アメリカの歴史家ジャドソンによって唱えられた19世紀後半のハプスブルク二重君主国におけるリベラリズムとナショナリズムの連続性の理論が役立つと考えられる。ジャドソンによれば、リベラリズムの社会においては産業ブルジョワジー (=リベラル) の男性が社会の中枢を占めていた。彼らは、財産権や市場競争を重視し、経済的自立のための努力を求め、教養としてのドイツ語・ドイツ文化を身につけた男性有産市民を理想像とし、これらに適っていれば帰属の如何に関わらず国民としてその社会に包摂した。だが、当時の支配層であった特権階級に対しては平等な権利を要求して対抗するも、経済的に自立できないとみなした女性や労働者、青年を国民の枠組から排除する思想を有していた。とはいえリベラルは、男性が成長あるいは教育を受け、財産をもって自立できれば、参政権を与えてもよいと考えており、彼らが「公」の領域へ参入する可能性も示唆していた。しかし、女性についてはあくまで自立できないゆえ「私」の領域に留めおこうとした。これに対して、ナショナリズムが優勢になった時代においては、帰属の同一性が重視されるようになったため、自立できないとみなされ排除されてきた女性ばかりではなく、青年あるいは教育・資産がなくとも「ドイツ人」である男性ならば社会に国民として包摂するようになった。それゆえ、女性のための活躍の場も用意された。リベラルたちは、二重君主国におけるドイツナショナリズムの勃興に従い、特に地方社会においては帰属的同一性を有する集団の味方をする方があらゆる活動の上で有利なることを認識したため、戦略的にナショナルとなったのである。いわば、リベラルな基盤の上に、必要に応じてドイツナショナルへと徐々に衣替えしていったとジャドソンは主張したのである [Judson 1994; 1995; 1996]。

本稿で扱う登山家協会も、リベラリズムの時代にリベラルの思想を共有した登山家たちによって設立された。彼らはその思想を登山に適用し、諸制度や個人の人々の自立性や自由を特に重視する一方で、「私」領域の確保に由来する父権主義的思想も有していた。自然の友もこうしたブ

ルジョワ登山家協会の思想や振る舞いを真似ることで一人前の協会として認められるようになったため、このリベラルの思想を受容していた。戦間期に入り、ブルジョワ登山家協会におけるリベラリズムとナショナリズムの連続性は協会制度や登山家のナショナリズム思想に表出された〔古川 2014; 2018a〕。本稿では、リベラル思想を選択的に受け入れ、ブルジョワ登山家協会と同じく自らを一人前の男性登山家からなる登山家協会だと認識し、青年と女性を排他的存在として捉えていた自然の友が、戦間期、党の国民化政策に同意する過程でどのようにその排他性を変更させ、あるいは維持することで男性登山家としての自立性や自由を保持していったのかを明らかにする。

以下、第1節では「赤いウィーン」の青年身体強化のためのヴァンデルン推進策のなかで自然の友が直面した問題とそれへの対処の仕方を検討する。第2節においては「赤いウィーン」の身体管理・育成の方針や女性の国民化を自然の友がどう受容したかを明らかにする。第3節では、自然の友内に生じた「禁酒問題」を採り上げ、身体を社会主義社会形成の手段としてみならず青年たちの禁酒要求に対して、男性登山家が彼らの身体の自由を主張することで抵抗した姿を検討する。

1. 青年ヴァンデルン推進策にみる自然の友の葛藤

1.1. 心身を癒す登山から身体・衛生管理のヴァンデルンへ

自然の友は1900年代から機関誌『自然の友』に健康に関する記事を掲載している。最初のものは筋肉疲労とそれに抗する「血清」が発見されたという内容を持っていた。乳酸と筋肉疲労の関係が研究成果として出てくるのが1907年頃であるため、自然の友は当時の先端科学の成果について大きな関心があったといえる〔*NF*, 1905: 73-74; Fletscher 1933〕。また、医学雑誌から登攀時の心臓負担が自転車スポーツよりも大きいことを抜き書きし、心臓虚弱者や青年への危険性を指摘した上で、過大な負担を心臓にかけないようにすべきだとも記された。一方、自然の中でスポーツを自由に行うことは仕事や飲酒によって害された神経や血肉を回復し、心身を強靱にするとともに人種の退化を押しとどめるという発想や「先鋭化する生存競争に対して、精神的肉体的利益を得るため」山を訪れることで、人間のうぬぼれや「反社会的行為」を減らすことができるとの主張もあった。設立者シュミードルによる日光浴の効果についての記事も1918年になると掲載された。彼は太陽光線が生物に与える影響を論じながら、様々な病気を標高の高いサン・モリッツで治療した事例を挙げ、高山で心身を動かすことの注意点と利点を議論した。また、登攀時に摂取する砂糖や携帯に便利なスープに関する記事や空気浴・水浴等にも触れられているゆえ、食事や生活改革的な行為への関心は高かったといえるだろう。自然の

友は生活改革運動と登山を組み合わせ会員の身体を改善向上しようとしたのである [NF 1905: 74, 121; 1906, 40; 1908: 62-63, 89-90, 182-183, 255, 279-280; 1909: 84-85; 1913: 200; 1914: 186; 1916: 39-40, 181; 1918: 18, 29-31]。

こうした状況を背景にして、1910年代には「青年」が着目されるようになる。その大きな理由は世紀転換期に開始された青年たちのワンダーフォーゲルが拡大し、1913年にホーエマイスナーで大きな大会が開かれるなど、多くの知識人や学生がその運動に注視していたからだと考えられる³⁾。自然の友は設立以来18才以下の青少年には監督責任が取れないゆえ、入会させないという方針を採っていた。1913年に開かれた自然の友大会でもその規定に変更は加えられないままであったが、ドイツ南西諸支部から青年ヴァンデルンの保護が要請され大会決議となった。さらに同大会では、社会民主党内の児童委員会結成の動きやウィーン支部での青年労働者（義務教育を終えた徒弟・見習い工を指す）向け会費の半額措置を100名程度が受けている旨が報告され、協会誌にも青年ヴァンデルンについての紹介文が写真とともに掲載されているところから、青年のヴァンデルンについて徐々に関心が高くなったといえる⁴⁾。

第一次世界大戦中に青年はさらに注目され、労働者青年の身体保護の強化が訴えられるようになった⁵⁾。そして1918年1月1日より、ウィーン支部では半額会費の適用が「オーストリア青年労働者連盟（1894年設立、1919年に名称を「社会主義労働者青年連盟SAJ」へと変更、以下SAJと略記）⁶⁾所属者に広げられたものの、社会民主党系組織に属する青年が対象とされたために、政治的傾向は強まった。また、戦争中には協会の後継者育成についての規定が作成されており、全協会レベルでアンケート行われた結果、ほとんどの諸支部から青年部を設置するという回答が届いた。ウィーン支部ではそれを受けて1919年春、難関登山を行う青年グループとしてアルピニステンギルドが、1920年には一般青年向け組織である青年部もつくられた。青年向け部門設立の際には「彼ら（＝青年）を私たちの共和国の、身体的に強靱で精神的に堅固な市民にする」ことが趣旨だと記され、ヴァンデルンを通じて全ての美と高貴さを青年に伝え、精神的身体的に完成された美をもった国民ein Volkを作り出し、自由と人間の威厳を内面化させたい、という自然の友の理念も描かれた。14才から18才の男子女子に専門教育を施し、後継者を育てるとともに、青少年の余暇時間を有効に利用しながら、ヴァンデルンによって肺結核に対する抵抗力をつけて予防し、心身の健康を促進することが意図されていた [M. Wien 1918 (1/2): V; (3/4): I-II; 1919 (7/8): IV; (11/12): II; 1920 (1/2): II; (3/4) III; (7/8) II-III; NF 1919: 67-68; Happisch, 101, 142]。さらに、1921年には大学生、中等学校生徒および18才以上の無職で両親と同居する女性から構成されるアカデミック・ヴァンデルングループも結成された。このグループは、社会主義を信奉する学生に自然の中で余暇を過ごせる機会を提供し、心身とも強化して再び勉学に勤しませるといった目的をもっていた [NF 1922: 72-74; M. Wien 1921 (5/6): III;

(7/8): IV-V; 1923 (5/6): VIII; 1924 (3/4): V; (5/6): VII⁷⁾。このようにして青年に対する意識・態度は徐々に変化した。ヴァンデルン・登山によって肺を鍛え、運動を生活に取り入れることで生活自体を改革しようとする方針に、戦争での若い人口喪失の補強という目的が加わり、国民形成のために自然のなかでの身体活動を利用しようとする党の方針に同意することになったのである。

1.2. 青年ヴァンデルンの本格化

1924年、SAJウィーン地区事務局は自然の友ウィーン支部と提携し、自然の友の青年会員(=自然の友青年部)全員をSAJもしくは自由労働組合徒弟支部へ所属させることにした。両者の協力により、ヴァンデルンや青年大会等も催され、SAJ所属の青年たちは、自然の友会員が有していた小屋利用料金の会員割引、登山講習会への無料参加、鉄道料金割引などを享受できるようになった。SAJのリーダー育成支援や会場場所等の提供、スポーツ用具の寄付・貸与も自然の友が行った。自由労働組合の徒弟支部には1923年にヴァンデルングループができるが、後に自然の友組合徒弟支部青年ヴァンデルングループへと作り変えられ、自然の友の一部となる⁸⁾。社会民主党内にも1923年青年ヴァンデルン局が設立されるが、そこがこれらの青年ヴァンデルングループを統括し、スポーツ教育や政治教育を行うことになった。社会民主党系のあらゆる青年諸組織は、ヴァンデルン局へ加盟することで、鉄道割引や小屋割引料金を利用できるようになったのである。[Neugebauer 210-211]。さらに、党のヴァンデルン局は自然の友事務所内にあり、SAJの青年ヴァンデルングループは自然の友青年部、自由労組徒弟支部ヴァンデルングループは自然の友組合徒弟支部青年ヴァンデルングループとなっていたことから、実質的に自然の友が青年ヴァンデルンを一括して組織していたことになる。

党のヴァンデルン局にとって最も重要だったのは、青年たちに簡素で安価な宿泊施設を提供することであった。1923年インフレの最中、ドイツ語圏最大の登山家協会であったドイツ・オーストリア・アルペン協会(以下アルペン協会と略記)の小屋料金割引制度が廃止された時期に、自然の友の青年会員たちは、ヴァンデルン局を通じて青年向けの安価な宿泊場所を提供するように各地の自然の友諸支部に向けて積極的に要請した。オーストリアにはドイツで発展した青年の家のような青年向け宿泊施設ネットワークがなかったのである。その結果、ヴァンデルン局は1923年夏向けに65の宿泊場所を確保し、同年中には130に、さらに自然の友が所有する34軒の小屋が土曜日を除いて宿泊場所を提供することになった。ヴァンデルン局はウィーン市の青年支援局、オーストリア労働者スポーツ・身体文化同盟ASKÖ(以下ASKÖと略記)、SAJや連邦産業交通省などとともに資金を出し、国民健康省も鉄道料金半額割引を保証した上、1925年秋には自然の友がより安価な料金で自然の友の諸施設を利用可能としたため、所属する青年

たちはスキーや登山をより安上がりになり、たとえば青年が二日以上のヴァンデルンを行う際には、通常鉄道料金の25%で行えるようになった。こうして「より貧しい青年達が故郷の美しさ、アルプス、ヴァッハウ渓谷などを知って、数日間自然の中で過ごせる」ようになったのである [NF 1925: 104; *M. Wien* 1923 (5/6): I-II; 1924 (3/4): VI; 1925 (7/8): I-II; 1926 (3/4): VI; 1930 (5/6) 114-115]。

また、自然の友は青年がヴァンデルンする場所自体も確保しようとした。第1次世界大戦中には既に軍部の将校たちが「軍事的な理由」でアルプスのあらゆるところに自動車で入り込むようになっていたが、戦後まもなくウィーン近郊の低山にも自動車道路が建設されはじめた。自然の友が週末ヴァンデルンをする場所に自動車が往来するようになると、彼らは自動車の発する排気ガスやドライバーの運転マナーの悪さなどを問題視しはじめた [NF 1916: 91; *M. Wien* 1924 (11/12): VI]。景気が悪化した1930年代には自動車道路建設が雇用を生む点は歓迎されたものの、道路建設とそこでの自動車往来が自然を破壊し、登山者やヴァンダラーにとって最大の魅力が失われると、自然の友は批判した。1933年、ウィーンの森に自動車道路を建設する計画が明らかになった際には、彼らはこう抗議する。この自動車道路建設には費用が800万シリングかかる予定であり、いずれのカーヴにもガソリンやオイルの看板が立てられることで景観は損なわれ、ウィーンの森が破壊される。それゆえ「この計画をウィーンの森の友ならば誰もが拒否しなければならない」。失業者に職を与えるという点では道路建設は善いものであり、またバスを利用して上まで登れるようになるので、病人や老人、身体障害者にはありがたいものだが、こういう人々にはそれほど困難を感じることなく遠足を行える機会が既に多くある。そちらを利用すればよい。より重要なのは、「健康、体力をつけること、そして国民Volkの若さを維持するために資金がすべて投入されることである」と。つまり、ウィーン・スカイライン建設による景観醜悪化阻止運動の理由として、青年の身体的強化のための登山・ヴァンデルン促進が挙げられ、ウィーンの森は、若くこれから生を謳歌する人々の健康のために取っておかれるべきだと主張したのである [*M. Wien* 1932 (11/12): XIV; 1933 (1/2): XIV]。

こうして自然の友は、制度的に市や党と協力しながら、ヴァンデルンの機会とそれを健康と結びつける言説を提供することで、青年の国民化に尽力することになった。

1.3. 「自然による啓蒙」のためのヴァンデルン

では、戦間期の青年育成において自然の友はヴァンデルンに何を託したのだろうか。彼らは14才以下の子供たちのための子供グループも結成しており、大学生も含めてあらゆる若年層を組織した。ヴァンデルンを通じて自然と接し、よい空気を吸い、日に当たることを子供たちにも勧めるようになったのである。ヴァンデルンは親たちと一緒にビアホールや居酒屋に行くよ

りもより高い価値があり、人間を健康にし、様々なものを学ぶ機会を与えると述べ、「若いプロレタリアートを娯楽から引き離すこと」が重要であるゆえ「子供たちを外に出そう」と会員を説得した [NF 1924: 81; M. Wien 1924 (5/6): II]。また、ヴァンデルンにはカトリック教会による偏見を質すための啓蒙という意味もあった。戦間期においても日曜日に教会に行かず、代わりに自然の友が主催するヴァンデルンに参加した子供が学校で叱られる場合もあり、自然の友はヴァンデルンを「罪のあるもの」だとした叙任司祭に対し公開質問状を送った。子供向けヴァンデルンは、主として子供の友⁹⁾とともに行われていたが、そのリーダー、カーニッツ (Otto Felix Kanitz: 1894-1940) による「君たちの子供を守れ、子供はプロレタリアの将来を助けるものだ」といった言葉が自然の友の機関誌にも記されており、自然の友は、子供の友とも思想を共有していたといえる [NF 1922: 83; M. Wien 1926 (3/4): IV; (9/10): VII]。

このカーニッツは社会民主党内では「中道」と呼ばれ、急進的な主張をする左派青年グループと党との間を取り持つ役割を果たしていた。大戦中には、第一次世界大戦開戦に賛成した社会民主党やインターナショナルの方針に反対し、戦争反対を唱えるチンマーヴァルト左派を支持する青年たちが出現していた¹⁰⁾。戦争が長びき、ロシア革命の存在を知り、急進化した彼らと社会民主党は対立し、オーストリア青年労働者連盟内の青年過激派は除籍された [Neugebauer 1975: 91-103; Rabinbach 1983: 65]。戦争が終結した直後には一時的に安定したが、戦後の革命で再び青年たちは急進化した。1919年11月の連盟第5回大会では、共和国となったことを受けて連盟の名称が変更される際に、社会民主党の党名と一致した「社会民主主義労働者青年連盟」は否決され、「社会主義労働者青年連盟」が採用されたことからわかるように、党の採った中道の方針に異議を唱える青年が増加していた。SAJでは、党に忠実な人びとと急進派との対立が生じるなかで、子供の友のリーダーであり、青年労働者の経済状況や労働条件の改善よりも、むしろヴァンデルン、キャンプ、遊戯やダンス、歌唱・シュプレヒコールといった活動を通じてSAJの文化教育的功能を強化すべきだと主張していたカーニッツが徐々に勢力を伸ばすことになった。1926年1月カーニッツがSAJの指導者となることで情勢は安定したが、そこには文化的教育的活動を中心に据えることで急進化を防ごうとする党の意図も含まれていた。SAJは1926年9月に、自由労組の徒弟支部は10月にオーストリア社会民主党側のスポーツ統合団体であるASKÖに加盟した。党はそうすることで、党内の急進派を統合しようとしたのであった [Neugebauer 1975: 120-135, 209-210, 278] ¹¹⁾。

この過程で自然の友ウィーン支部にも、急進的政治思想をもつ青年会員たちが現れるようになった。そのうちの一人は社会主義や革命とヴァンデルンを結びつけた論考を協会誌に投稿した。「私たちにとってヴァンデルンの意味とは何か」と題する彼の文章では、「労働運動を少しでも知っている人は、それによる社会的成果を得るのがどれほど難しいか知っている。一步

一步、先人が作ってくれた前提を僕たち若者が忠実に受け継ぎ作り上げていく必要がある。ヴァンデルンはまた、偉大な文化闘争や革命的行動、精神的物質的解放へのきっかけを与えるのを手伝ってくれるのだ」と述べている。これに対し自然の友の先人達は、青年たちの革命といった性急な要求を抑えることを望んでいた。自然の友編集部は、急進的ヴァンデルンを要求する上記青年の論考と同じ号に、ドイツ・カールスルーエの会員が書いた「青年と自然」という論考を掲載してその意図を表明した。古参会員である筆者は、戦後の青年たちのモラル低下を危惧しながら、青年を啓蒙すべきだと次のように訴えている。「年をとった者たちへの青年達の表面的な嫌悪」は地質学、植物学、天文学などを学ぶ自然科学学習ヴァンデルンを行えば消えていき、流行として自然の友に入会するのではなく「精神的欲求」から入会するようになるだろう。若者に対して「校長」がするようにではなく、「善き友人」として語りかけ、精神的解放と魂の品格を上げ、倫理的な完全さを求め、より高い文化、人間の理想を求めて闘う姿を示すことでその「父たちに対する」感謝が生まれるはずである、と。また、別の号では1880年代に遍歴を経験したウィーン在住会員が、現在の青年たちは、警察の監視や逮捕などを経験し、苦勞してヴァンデルンした時代から、「今のように非常に遠い国まで諸条件の整ったヴァンデルンができる」時代への「労働者の文化的生活の進歩」を認識すべきである、と警告した。さらに、1930年には「政治的青年運動はひどく弱くなってしまったが、それは青年という質から理解できる」、「青年はつまらない政治的な小さな仕事を嫌い」「我慢することができずにいる」が、「私たちの日常政治は粘り強く闘うものであり、わくわくするものではない」、「何か革命的な心を奪うようなものは何もない。あらゆるところで立場上の争いがあり、最も冷静なタクティクスが用いられているのである」とも述べられ、革命に走ろうとする青年たちを諫めたのであった [NF 1925: 121, 127; 1927: 176-177; 1929: 232; 1930: 114-115]¹²⁾。

ここから、青年たちは直接的な成果を求めその手段としてヴァンデルンを捉えていたが、古参会員は時間のかかる自然科学学習をもとにした教育や地道な政治的活動を基盤に人間性を高めることを主眼にしてヴァンデルンを行っていたことが解る。この差異は世代間の問題ともいえよう。だが、それを別の視点からもみることができる。すなわち、「自然による啓蒙」という動植物の世界を知ることによって社会を考察し、精神性を高めて労働者を啓蒙するという設立以来のリベラルな手法を用いたヴァンデルンを青年たちに行わせることで、急進化を抑え、自然の友が理想とする個々人の自立性と自由意思を重んじる会員を育成しようとしたのである。そこに、戦間期の国民化の過程におけるリベラルな思想の表出が見いだせるのであり、リベラリズムとナショナリズムの連続性が提示されたといえる [古川 2018b]。

2. 「赤いウィーン」における身体・衛生政策の自然の友による受容

2.1. 身体衛生管理

戦間期も半ばを過ぎると青年ヴァンデルンが本格化したばかりではなく、自然の友の諸活動にウィーン市政の身体・衛生管理政策が積極的に導入されるようになった。それは、自然の友が1920年代後半、水上スポーツに力点を置くようになったことに示される。戦間期にはオーストリア労働者・兵士スポーツ連盟VAS¹³⁾やASKÖのもとに社会民主党系のスポーツ諸団体は統合された。VASの会長となったのは自然の友の二代目会長となるフォルカート (Karl Volkert: 1868-1929)であり、副会長が自然の友編集長のハピッシュ (Leopold Happisch: 1863-1951)、ASKÖの会長には大戦前に青年労働者連盟を率いていたドイチュ (Julius Deutsch: 1869-1936)、副会長は引き続きハピッシュが務めていた。このような統合団体が結成されたことで自然の友では、第一次世界大戦前には交流がほとんど無かった各種のスポーツ団体、例えば労働者水泳協会との情報交換や相互交流が行われ、登山やヴァンデルン以外のスポーツや文化活動も盛んに行われるようになった¹⁴⁾。

水上スポーツが盛んになったもう一つのより重要な理由は、「赤いウィーン」のもとですすめられた衛生政策の受容ということである。1926年、ウィーン支部ニューズレターには、労働者水泳協会の機関誌から労働者区ファヴォリーテンに作られたヨーロッパで最大で最新の室内プール・アマリエンバートの紹介が転載された。同年秋には、水上ヴァンデルン、つまりボートやカヌーを行うグループが結成され、1927年夏にはウィーンのドナウ川河畔に自然の友のボートハウスがオープンした。1928年の協会大会で、ハピッシュは「登山家がヴァンデルンをせず、プールに向かっているという現象」がここ数年に生じ、「ウィーンの住民がゲマインデ(自治体)のプールや河岸に設えた労働者向けプールに日曜毎に出かけているが、これはかつてないことだ」と驚いている。ハピッシュの報告によれば、このようなプール経営を進めたのはタンドラーであり、ウィーン市が「清潔さを求める」政策を行っているからである。さらに女性は肌を覆い隠す傾向がなくなり、水浴が健康によいということがわかったからでもあった。そして「こうした大衆の変化に私たちも適応しなくてはならない」とハピッシュは述べ、ドナウ河畔とボーデン湖畔にボート施設が建設されている理由とした。1932年大会でもハピッシュは水上スポーツに触れ、カヌーを用いた「水上ヴァンデルン」は将来重要なものとなるだろうから、自然の友はこのスポーツ活動をできる限り援助すると主張した。自然の友は1930年、既に有していたボートハウスに加えてアルテドナウ沿いの区域を1.2km借りあげ、自前のボートハウスを建設した。6月末にその開設式が行われたが、そこには会長リヒターばかりではなく、ウィーン市長ザイツ (Karl Seitz: 1869-1950)、タンドラー、ASKÖ会長ドイチュが参列し挨拶している。人気の出たボート部員数は1931年には4441名となり、ボートハウスが手狭になったため1932年に

は拡張工事がなされるほど盛況であり、協会誌にはヴァンデルンにカヌーを利用した記事が数多く掲載されるようになった [M. Wien 1926 (3/4): IV; (9/10): VIII; 1930 (7/8): IV; 1932 (1/2): XII; 1933 (5/6) IV; (7/8): III; NF 1928: 191; 1932: 97-100, 183-184; NF. Protokoll 1928: 18; 1932: 26]。

このような身体衛生管理とは別に、スポーツを行う際の定期的健康診断の重要性を説く記事も雑誌に掲載され、特に青年と女性に注意が喚起された。1926年、自然の友ウィーン支部のニュースレターでは青年会員に対し、若い徒弟向け疾病保険に入り、健康診断を受けるよう勧めている。病気になった際には社会保障費を費やすことになってしまうゆえ、早期に検診を受け、病気に冒されない健康な体を維持す必要があると論じ、ウィーン市も休暇の家を建設することを推奨していると付記された [M. Wien 1926 (7/8): V]。さらに、成長期の青年は運動することによって将来の運動能力の発達が妨げられることがあり、また生来的に心身の器官が弱いとされた女性も病気がある場合にはそれを悪化させる恐れがあるゆえ、診断を受け正しいアドヴァイスの下に適した生活を行って害を避け、身体や業績能力を向上させるようにとの注意がなされた。また、スポーツ医制度が設けられ、ASKÖに入った諸団体はASKÖのスポーツ医が、それ以外のスポーツ団体はスポーツ医が会員の健康管理を担当し、食事を含めて練習の際に選手に対してアドヴァイスを行うことになった。会員が罹患した場合の責任は医者も分担するが、もしそれを嫌う場合は、青年の両親も含めて自己責任となり、スポーツ団体は責任をとらないと記され、登山時の健康全般についての細かい指示もなされた [M. Wien 1933 (1/2): X-XI]。ここから、第一に、女性は本質的に男性とは異なるという偏見・蔑視が残存する一方で、将来的に子供を産む身体の維持という含意があること、第二に、将来的な国民の担い手である青年の健康が重視されているということ、第三に、スポーツ諸団体にはスポーツ医が駐在して監督するという当時最新の方式を採用することで、青年や女性がスポーツをする際には、半ば強制的に彼ら彼女らの健康を管理しようとしていたことがわかる¹⁵⁾。つまり、「赤いウィーン」の健康政策下で、ASKÖが社会民主党系のスポーツ諸団体の健康維持・スポーツ促進ならびに身体管理を推進し、それ以外の諸団体にもスポーツ医を配し、全体として国民の身体管理が進められ、自然の友もそれに同意していたということである。

2.2. 女性による登山

では、「国民」形成に欠かせない女性を自然の友はどう見ていたのか。ここでは特に登山活動に限って見ていこう。女性の登頂記録は16世紀半ばに遡るが、18世紀末から19世紀初頭にはロマン主義の影響により壮大で崇高な自然景観を鑑賞する目的をもって山地に入る貴族やブルジョワジーの女性たちが増えていった。19世紀末になるとアルペン協会会員が妻と共に登山を行

ったという記録が出てくる [Halbritte 2002: 151-152; *ÖAZ* 1896: 460, 216]。また1905年、自然の友の雑誌にも協会指導層の会員が妻や友人ともにトリブラウンの岩壁に登り、妻が岩にあたってけがをしたにも関わらず、「彼女は勇敢にも登りを続けた」とその勇気をたたえ、翌1906年にもまたその夫妻と友人はシュタイネル・メーア、ミッターホルンの東壁に初登頂したことが記された。ウィーン・フロリツドルフ支部長が撮った1911年の写真にはホッホヴィルデ南壁 (3480m) に登攀途中であるロングスカート姿の女性三名が写っている。このような例からわかるように、女性は岩場も登攀してはいたが、基本的に登山家の夫や兄弟といった男性とともに登る場合が多かった。1911年には自然の友の入会規定に「会員の妻および娘で、会員と同じ生計を持つ者」が、協会雑誌を家族で一冊取る場合は、会費を割引するが (連携会員)、「雑誌を欲しい場合には、正規の会費を支払う必要がある」と決められた。一方、『自然の友』編集部は、ザルツブルク支部に所属する二人の女性会員の登頂業績を雑誌に掲載しなかった点を詫びて、彼女らの記録を新たに掲載し、「有名な作家である女性Fräulein」および「勇猛果敢なツアーを行うご高齢の女性Fräulein」として紹介している。フロイラインと呼ばれているところから未婚女性であるゆえ連携会員とはならず正会員だったにもかかわらずザルツブルク支部は彼女らの存在や行為を無視し、ウィーンの編集部がそれを正す、という行為が行われていたのである。当時、既に男性登山家からの自立を意識している女性登山家もあり、彼女らは女性単独で男性ガイドとともに登攀した。こういった女性たちは男性会員たちに尊敬と驚異のまなざしで迎えられており、1906年の『自然の友』にも英国人女性によるヒマラヤ登山の計画が雑誌に掲載され、1912年にはその成果とともに「大胆な女性登山家」として紹介された [NF 1905: 110-112; 1906: 42, 61; 1907: 75; 1911: 48, 287; 1912: 282; Günther 1998: 306-312]。

このように第一次世界大戦以前には、女性は夫や兄弟とともに登攀することが当然視されており、男性の庇護の下に置かれたが、その例外として男性ガイドと登攀する自立した女性登山家が存在するとみなされていた。だが、その状況も第一次世界大戦を期に変化し始める。男性が出征し、人手不足から協会支部を統括する支部長に就任する女性たちが出現するようになったのである。大戦前からほとんどの大きな登山家協会では女性を受け入れていたが、第一次世界大戦後になってもスイスアルペンクラブが女性会員を入会させなかったため、スイスでは女性のみアルペンクラブが設立されたことを紹介しながら、「私たち (=自然の友) は、最初から女性に全く同じ条件で加入を認めている。女性は常に信頼のおける活動を行う闘いの同志である。それゆえ私たちの階級の女性は自然の友として、心から歓迎されている」と記した文書を掲載した [NF 1914: 58; 1918: 22]。

自然の友は、こうして女性の受け入れに対しては平等な立場をとったが、意識面では必ずしもそうではなかった。第1次世界大戦直後、ヴァンデルンをする人びとの衣服に対する注意を機

関誌に掲載した。そこでは女性が「ズボンを履いて」ヴァンデルンするのはよいが、その格好のまま駅まで戻ってくると、「登山家の信望が地元の人びとの間では落ちてしまう」と記された。ズボン着用の女性たちは実は労働者階級には属していないのだが、地元の人びとは、彼女らは衣服がないゆえズボンを履く労働者層の女性だと誤解してしまうというのである。続けて、「戦時にはバイエルンの司令部がベルリンからきた「ご婦人方」が膝丈の革ズボンでヴァンデルンをするのを禁止したが、今では多くの人びとが通る道でそのような格好をしている」女性がおり、彼女らは「農民たちが棍棒や鎌で追い返すだろうし、また「スパルタクス」として誹謗される危険があるだろう」とも述べている。さらに自然の友は、様々な色のディルンドル（女性の民俗衣装）を身につけるか、あるいは水着だけでヴァンデルンする団体や小屋で辺りを顧慮せず、滞在だけを楽しもうとする男女混合の団体の行為をエチケット違反であり、道徳の荒廃を示すものだと批判した。この文章から、自然の友は大戦前のブルジョワジーの登山家を模範にして労働者登山家としての品位を保持したいと願う一方で、都市のブルジョワ階級の女性たちを登山家たちのルールを知らない存在だとみなし、同時に「強い女性」も仄めかしながら共産主義者と自分たちの差異化をはかり、女性ヴァンデルンを批判したといえる。彼らは、ブルジョワ登山家協会の行動規範に沿った登山を女性に要求し、ブルジョワ社会の、夫に従い家事一般を司る良妻賢母の女性像を求め、男性の振る舞いを模倣するような奔放な女性像を拒否していたのである。ブルジョワ層からなるアルペン協会の雑誌でも、女性がズボンを履いて登山するのは問題ないが、リュックの中に小さなスカートを入れておき、小屋で休憩する際にはそれを着用すべきであるとされ、それは女性の腰を冷やさないためだというもっともらしい理由付もなされていた [NF, 1919, 9/10, 116-119; Schmid-Mummert 2011: 33-36; Günther 1999: 343]。

戦間期になっても女性がリュックサックを背負うべきかどうかといった議論や女性は脂肪が多く筋肉が少なく弱いという医学的見地が紹介されており、登山家諸協会の女性に対する偏見はなかなかぬぐえなかった。女性の登山について論じたギュンターによれば、「女性登山家たちは、アルピニズムを担う男性社会で自己価値を高める戦略を採った」。当時の価値尺度からすると、彼女たちの行為は性の境界を越えるものであったため、山に行く女性が否定的に捉えられたのである。女性登山家たちは、しかし、満員のマットレスの部屋で寝ること、洗濯や着替えができないことに不満を漏らした。それゆえ1923年、アルペン協会はテルツ綱領で女性専用の部屋やベッドを増やすことを謳う一方で、未婚の男女が相部屋になることを禁止した。男女混合の登山は、当時最もエロティックな現象だとみなされ、批判が集中していたのである。ギュンターは、アルピニズムがブルジョワ男性の文化的実践であり、他の性、他の文化による不当な干渉を排除したため、女性によるこうした「わがまま」も含めて道徳違反をする登山家は偽

物とされ、「本物のアルピニスト」との間に境界線がしかれた、と述べている [Günther 1999: 292-298, 322-325, 343]。この区分は上で述べたように自然の友にも当てはまっていたといえるだろうが、彼らは特に「赤いウィーン」市政下でその意識を徐々に変えていく努力を開始した。

ハピッシュは1929年、社会主義インターナショナルのフリードリヒ・アードラー (Friedrich Adler: 1879-1960) 宛の手紙で自然の友の紹介を行っているが、「遠足やヴァンデルンによって女性と母親は始めてその自由を獲得する」と記した [Happisch 1929]¹⁶⁾。また1932年の自然の友協会大会では会長リヒターが、女性が大会の代表団のなかに誰も入っていない点を指摘し、「保守的な社会主義組織」の特質だと批判している [NF. Protokoll 1932: 99]。また1933年には、あるウィーン支部会員が、数々のアルピニズムにおける女性の業績を挙げながら、「女性はこの分野において平等であることが示された。しかし、彼女たちは業績だけ求めているわけではない。彼女らはむしろアルピニズムにおいて心身の若い泉を見つけているのであり、男性とともに機械化が進行する経済のくびきのなかでの緊張が緩められることを男性と同様に求めているのだ」と主張した [NF 1933: 203-208]。このような主張が20年代終わりから30年代初めになされるようになったのである。それは戦争直後の女性に対する階層的排他性をもった意識から女性をその社会の内側に入れるナショナルな包摂性を有するものへと移行しはじめたことを意味していた。

2.3. 「国民の身体」を形成する女性-国民・階級への貢献

ギュンターは男性の山行記やアルペン文学に出現する女性の表象を分析しているが、登山家たちは山と女性の関係を男性と女性の関係に結びつけて論じる場合が多かった、と述べている。山自体を女性として表象し、美と母性の代表とする場合や特定の山に対する愛情を女性に対する愛情と、また山の扱いにくさを女性の扱いにくさと同置する場合などは、山行を女性に対する奉仕ともみなすことができた。だが、生身の女性と岩やフィルン（万年雪）を持つ「山＝女性」とを比べて、前者を後者の下位におく場合などもあり、女性が戯画化されることもあった。とはいえ、それは次第に変化し、第一次世界大戦を通じて男性性が強調され、「男性ブント」的諸団体のなかでは、女性はむしろ家族的なものとみなされ、表象の上では性的なものは避けられるようになった。平地は退廃的であるが、山は性的なものには無関心な存在であるゆえ、山でこそ男性性を発展させることができると描かれた。登山をする際の英雄的行為は女性を得るためのものともみなされ得た一方で、緊張感や危険なしの登山を女性的だと主張することでモラルの墮落へと至らないようにし、男性性を意識的に安全な場所へと移したのである。 [Günther 1999: 206-224]。

戦争中にはまた、女性は「私たちの次の世代を産むための」「弱まった国民の身体を再建する

ため」の母であるゆえ、鍛える必要があり、身体的な能力では限界があるが、防衛力の一要因として評価されるべきである、という発言がアルペン協会においてはなされるようになった [MDÖAV 1917: 99-104]。『自然の友』誌にはこのように女性を未来の「国民の身体」形成のための存在とする直接的表現は出てこない。しかし、出産制限に関する文章はある。その記事は、経済的貧困を克服しながら自助により人間らしい生活を送るために産児制限を行い、「新しい子供」が誕生することによって増える支出を減らすべきである、と主張している。そうすれば既存の子供と両親は「自然の美しさを享受して人生を豊かにすることができ」「いかなる子供にも人間に値する生活を与え、心配から解放し、文化的欲求や知的欲求を満たし、そしてより高いところへ到達できる。これらを日常生活から生み出せるのである」「5人以上の子供がいる家族はこの美しさから得られる精神的豊かさから排除されてしまう」「こうすることで階級全体が自然美を受容する能力を高められるのであって、人間と文化に役立つはずである」と記された。この会員は、貧しいゆえに、子供の数を減らすだけでなく、少ない子供を豊かに育てることが階級全体に有益であるとする積極的優生学の思想にラマルク主義的な環境主義が結びつけられた Tandroler 式の発想を持っていた、ということになる。また、30年代初め自然の友ウィーン支部では、女性は座っている仕事が多いのでできるかぎり運動に参加させ、「調和させることが必要だ」として、女性に対し体操コースに積極的に参加するように呼びかけ、1929/1930年にはコース参加者が2倍になったのを誇らしく記録している [NF 1923: 60-61; M. Wien 1932 (9/10): XV]。1932年、ウィーン支部ニュースレターにはASKÖ書記のガストゲープ (Hans Gastgeb: 1897-1970) による40年間にわたる労働者スポーツの歴史がまとめられており、そこでもVASやASKÖの基本方針は、両性の平等と抵抗力を付けるための全人による定期的身体運動の実施であると述べられており、形式的には男女が平等に、ともに身体運動を行うことで階級の解放が行われるとされていた。この階級の解放には、女性の身体運動、産児制限とそれに伴う文化の享受が未来の階級をより良い方向に導くのだという考え方が含まれていた。だが、自然の友には一方で、ヴァンデルンは「ドイツ民族」の本質であるといった発想やリヒャルト・ヴァーグナーの北方神話物語の受容、さらに「オーストリア人」という帰属意識を推進して、「オーストリアのツーリズム」を促進していこうとする傾向も戦間期後半には出現した [M. Wien 1932 (11/12): V-VII; NF 1919: 14-15; 1923: 14-15; 1926: 168-171; 1929: 5-8; 1931: 41-52, 91-99]。これらを踏まえれば、階級の解放は、階級全体ではなく、容易に「国民の身体」という枠に限定される可能性があった。

戦間期の山行記においては山と女性を対比してセクシュアリティを無性化させる傾向があった。だが、先述したようにアルペン協会は戦間期に未婚の男女の相部屋を禁止していたことからわかるように、現実においては小屋で男女が相部屋になることが普通に行われていたといえ

る。また、登山家協会の小屋ばかりではなく、山農の山小屋に宿泊する場合などは、農民社会の慣習である性的な自由奔放さ (libertür) ¹⁷⁾ が、20世紀に至っても続いていたと考えられる [Grimm o.J.]。しかしながら、それらは『自然の友』の山行記にはほとんど出てこない¹⁸⁾。それは、登山家自身が描く山行記では自らの行為を正当化し、無性化された女性を肯定して描いていたからであるが、人口の再生産を目的としない性行為が健全な国民を形成すべき登山とは相容れない、とも考えられたためでもあるだろう。戦間期の男性登山家が、女性の登山に関しては国民化の思想を素直に受け入れているのは、従前から女性の登山自体の意義を真剣には考えておらず、それゆえ問題とされるべきものがない、とみなしていたと読み取ることが可能である。彼らの女性やセクシュアリティについての思想自体が依然として19世紀リベラリズム時代の女性に対する階層的排他性を孕んだまま維持されていたからだともいえよう。この点は青年女子のための身体保護・運動促進においても当てはまっていた。青年グループの内訳こそ男女比で示されたものの、労働者男性登山家たちが語る言説に出てくるのは、青年男子を表現する Jugend であり、青年女子 Mädels は青年男子のなかに埋もれていた。彼女たちの声は自然の友の機関誌・ニュースレターには管見の限り記されていないところから、労働者層の男性登山家は、彼女たちの存在を国民化されるべき女性の前段階としてのみ捉えていたといえるだろう。

3. 自然の友の禁酒問題-身体への介入に対する男性登山家による抵抗

最後に自然の友の禁酒に対する態度から、男性登山家が自身の身体をどうみなしていたのかを検討していく。

3.1. 飲酒から節酒へ

シュミードルによる自然の友設立の動機の一つは、ヴァンデルンを通じて節酒を勧めることであった。ところが、協会誌の山行記には頻繁に飲酒の描写が出現する。ある会員はダッハシュタインの南壁の素晴らしい眺めに驚き、二時間半歩いて標高1050mにあるレストハウスに到着した。そして、「ここほど、自然の岩中にある地下倉庫からグラスごと運ばれて来る、冷えた美味しい自家製ビールを飲めるところは他にない」と述べて、ビールを味わってからヴァンデルンを再開し、その後、下山して駅で電車を待つ間も向かいのレストハウスで「最後のビール」を飲み干した。いくつかの支部ではビールボイコット運動やアルコールを飲まないようにとの啓蒙活動が行われてはいたが、それゆえに登山時に飲酒をしなくなったということはなかったようである。遠足や登山を終えた後には必ず酒を飲む場が設けられており、節酒が守られた気配はない。この点においてアルコールを資本主義がもたらした悪であり、人間の退化を招くものとして非難した V. アードラーや1905年にウィーンで設立された労働者節制協会が採った方

針と自然の友協会のそれとは異なっていたといえる [NF 1900: 41, 76; 1901: 40; 1902: 5; 1905: 6, 65, 140; 1908: 211; 1909: 82-83; 1910: 135; Sandner 1999: 231-322]¹⁹⁾。

だが、第1次世界大戦中に変化が起こる。かつて登山時に飲むとよいとみなされていたワインの摂取が危険な行為であり、登山能力を下げることが判明したと記す論考が『自然の友』誌1915年6月号に掲載された。文中ではブルジョワ登山家のピヒル (Eduard Pichl: 1872-1955) の言葉が引用されており、「私はツアーに絶対アルコールを持って行かない。私の最も好む飲み物は数年前からレモン水だ」と紹介されている [NF 1915: 119-120]。その後も自宅での飲酒は構わないが、ツアーの際にはアルコール抜き飲み物か水を飲むべきだという記事が載り、ビールを飲むことも罪作りだ、と主張する文章も紹介された。命の危険に晒される戦争中であるからこそ身体に注目が集まったのであろう [NF 1915: 146, 217]。

戦後まもなく、登山をする側も宿屋も、小屋での飲酒が当然だと思っている点を飲酒強制だと述べて、改善して欲しいと主張する禁酒運動家からの意見が『自然の友』誌に掲載された。ウィーン支部ニュースレターにもアルコールとスポーツの関係について論じた記事が載り、飲酒による運動能力の低下が実験結果によって示された。また、労働者節制協会のビラを支部の小屋に置くようにという要請記事も同ニュースレターに載っている。さらに、ウィーンの登山家諸協会が集う利益団体の会議でも、アルコールを小屋で出すことに対して予防措置をとるべきである、という決議が出され、自然の友もこれに賛成し、各協会の代表が新しく小屋賄い人と契約をする際に注意を喚起するよにとの意見を述べた。だがそれに続けて、安息のための小屋であるゆえ、小屋でのアルコールは追放すべきではあるが、小屋で酒類を出すのは慣習であり、飲酒が習慣になっている世代もあり、アルコール類を出さない場合、客を付近のアルコールを出す小屋に取られてしまう恐れがある、そうなると小屋の賄い人の利益にもかかわり禁止しづらいと主張した。他の登山家協会もこれに同意し、全体として予防措置という程度で収まった [NF 1922: 39-40; M. NF 1922 (7/8): VII; (9/12): III-IV]。

3. 2. 政治的急進派の青年たちに対する抵抗：私的領域である身体の確保

だが、青年たちはこの方針に異議を唱えはじめた。1923年、ウィーン支部地区大会において青年たちがアルコールを出さない小屋を造るべきだという動議を出したため、支部がその決定を迫られている、という投稿が一人の学生会員によって行われた。小屋をアルコールなしにすべきだと主張するこの筆者は、問題解決法としてスイスで行われているように会員が交替で小屋の賄いをする、アルコールの代替飲料を用意する、水がない場合は人工的に濾過して飲み水を作る、賄い人にアルコール販売代金の補填を行うなどの改善策を提示し、自然の友が小屋でのアルコールを禁止すれば、付近にある別の協会の小屋もそれに倣うかもしれず、アルコール

問題はそれほど克服できない問題ではない、と主張した [M. NF 1923 (5/6) II-IV]。禁酒を躊躇する支部幹部に対して青年会員が批判し、健康政策を迫ったのである。1923年のライブチヒ自然の友大会では小屋ばかりでなく、集会、舞踏会においてもアルコールを禁止すべきである、という動議が8本提出された。ところが、自然の友全諸支部を統括するウィーン中央委員会はこれらの動議を否決した。もともと1913年の自然の友協会大会においてドイツの支部によって出された青年ヴァンデルン時の飲酒禁止という動議は、ハピッシュによって一端制され、その後長い協議の末ようやく決議となったという経緯があった。その点からもわかるように、オーストリア側は諸手で禁酒に賛成をしたわけではなかったのである [NF. Protokoll 1913: 69-70, 77]。そして、1923年時には飲酒を禁止することで個人的な自由まで制限される必要はない、と強行に主張し、この問題の処理は諸支部に任される、という回答を行った。だが、この時も中央委員会が折れて最終的には、自然の友の家でのアルコール抜き経営努力、アルコールの非強制、代替飲料の用意、禁酒文書の配布、アルコール被害の啓蒙、『自然の友』や支部ニュースレターでアンチ・アルコールの文章を掲載すること、という決議が行われた。引き続き禁酒問題は議論され、1924年には安価なシュナプス（火酒）を沢山販売して収入源とするような姿勢は文化組織としてふさわしくない、という意見まで出始めた。ウィーン近郊に住む教師からは、アルコールが人間を墮落させ、家族内の不和を生み、子供の身体器官に悪影響を与え、命を縮めて知恵遅れを招き、結核に対する抵抗力を弱めるだけではなく、性病の蔓延や飲み過ぎによる事故や死亡の原因となっているという理由を添えて、労働者階級の敵をアルコールだとする投稿が二回続けて行われた。禁酒家であったV. アードラーを挙げながら、彼が自制していた点に触れ、アルコールは社会的抑圧と経済的搾取であり、その足かせから解放されるためにプロレタリアートとして階級闘争を行い、この危険な敵を社会主義の文化運動から排除し、連帯的社会秩序をもって必要の国から「自由の国Reich」へ跳躍しなくてはならない、と訴えた。彼の意見は、タンドラーの優生学的主張を反映した形で述べられているところから、自然の友にも党の政策を受容した会員がおり、積極的にそれを主張するようになったといえる。[M. NF 1924 (3/4): II; NF. Anträge 1923: 26-27; NF. Protokolle 1925: 94; NF 1924: 79-80, 103]。

ところが、翌年の1925年3/4月号では編集長ハピッシュ自身がこの主張を制する意見を執筆した。それによると、これまで協会誌にこの教師による文章を掲載してきたが、反対の意見が多く、『自然の友』を論争誌にはしたくないので、以降の掲載は控えることにする、「諸種の運動に猪突猛進する人びとの意見は、活字にするとその分費用もかかり誌面も制限され、多くの人びとの怒りを買ってしまうゆえ、集会で発言してもらいたい」と述べ、むしろ受動喫煙を生んでしまう禁煙の方が重要だとした。加えて、彼は実際に工場の煙突や鎖に引き裂かれるような生活をしている上に芸術でもそうしたものは見たくはないので、表現主義、未来派、キュー

ビズムといった「瓦礫」は『自然の友』誌には載せたくない、とも主張した。つまり、編集長という立場から、あくまで誌面は論争の場にしないというレトリックを使って禁酒を現代芸術と同列においてそれらとは一線を画すという姿勢を示したのであった [NF 1925: 64]。

1925年の自然の友大会では、アルコールと喫煙問題についてまとめて話し合いが行われた。1923年時の大会と同様、禁酒禁煙を主張する動議が出されたが、今回の中央委員会は、禁酒禁煙問題はあくまでガウや諸支部の判断に任せるという動議を提出した。ワインの産地であるドイツ・プファルツ・ガウはそれに同調し、プファルツではワインを出さないわけにはいかないと主張した。だが反対側は、従来と同じく飲酒の身体への悪影響と階級闘争のための力の損害を訴えた。これに対しウィーン支部は、アルコールは文化的問題であり、場所によって事情が異なることを認識すべきであり、こうした決議が国際的になされるべきではないと述べ、山中の小屋で客を他の小屋にとられてしまうという理由を付けた。とはいえ、禁酒運動には反対しないとして、小屋での酒類の値上げとノンアルコール類の値下げを管理人に設定させることが1923年の決議に付け加えられた。1928年の大会でもアルコール反対の動議が出されたため同様な決議が行われ、管理人との契約時にシュナプスを出さない義務を付け加えた [NF. Protokolle 1925: 89-95; 1928: 57, 66, 87]。

こうして1922年から青年や教師による禁酒要請が行われたものの、ウィーン中央委員会は飲酒が健康に害を及ぼすことは認識しつつも、それを全面的に小屋経営までに広げることは阻止し、団体として禁酒を強制するような態度は採らなかった。この点に関してベンゼルは、「酒場は唯一のプロレタリアートの政治的自由の砦である」と述べたカウツキーから引用し、自然の友が禁酒を強制しなかったのは、労働者にとって酒場が政治談義や社交生活を行う上で重要であったからだ、と述べた [Bensel 1985: 231]。しかし、自然の友で議論されたのは主として「政治的中立」が求められていた山中での小屋や登攀中における話であり、ベンゼルの主張はあまり妥当性がないだろう [古川 2014]。また、ギュンターは、アルペン協会にも禁酒を進める提案はあったが、それは専ら飲酒が運動能力を低下させるという視点から書かれており、これに対して自然の友はむしろ生活改革的な視点によって描かれている、とした [Günther 1999: 41-43]。しかし、これまで見たように自然の友においても飲酒による登山能力の低下の議論はあったゆえ、ギュンターの意見も全面的には肯首しがたい。むしろ自然の友が飲酒を禁止せず、あくまでも啓蒙という穏健な方法にこだわった点、そして飲酒は個人の自由、つまり身体は個人の所有物であるという主張がなされた点が着目されるべきである。それは私的なものである身体へ公的なものが介入することへの男性登山家による抵抗であり²⁰⁾、リベラリズムの時代に作られたブルジョワ登山家協会の慣習でもあったと考えられる。リベラルの思想に由来する自立性や私的領域を重視することで、「身体の国民化」に抵抗したのである [古川 2014; 2018a]。

おわりに

自立した男性登山家が担っていた登山家協会自然の友は、青年と女性の身体を保護し、運動させることによって国民化を進める「赤いウィーン」の政策に同意した。女性の国民化について協会内には大きな抵抗は出てこなかったが、青年の国民化については自然の友が維持してきた思想や慣習との齟齬が生じた点が問題となった。それは、政治的に急進化した青年たちの出現をきっかけにして表出されたものである。彼らはヴァンデルンを革命に向かって身体を鍛え、将来の社会主義社会の実現の手段としたが、自然の友は現存社会を生き抜くための啓蒙の手段としてヴァンデルンを捉えた。そして、従来の自然科学学習を伴うヴァンデルン、すなわち「自然による啓蒙」をもって青年を抑え、精神性の重視へと青年を向けようとした。しかし、青年たちはあくまでも身体も将来の革命成功に必要な手段としてみなしていた。若い彼らは、登山家協会の慣習となっていた飲酒が身体に悪影響を及ぼす点から、禁止すべきだと訴えた。自然の友はこれに対して飲酒を続ける方針を採り、その理由として、他による自らの身体への干渉の嫌悪を挙げた。それは男性ブルジョワジーであるリベラルの「公」「私」の区分と個々人の自立を説くリベラリズム時代に作り出された思想に由来するものだった。「赤いウィーン」による身体を通じた国民化の過程で、自然の友の指導層は国民化自体には賛成しながらも、登山家協会としての活動を行っていく上で譲れない部分については従来からのリベラルな思想を護り通し、それと国民化の方向性に何らかの摩擦が生じた場合に啓蒙や自立性・個人の自由をもって解決しようとしたのである。

一方、女性の国民化については「赤いウィーン」が進める政策に全面的に賛成した。自然の友は戦間期に入って、女性が国民形成に重要な役割を果たすことを認識し、女性が身体運動を行い、丈夫な身体を得て健康な国民を産み育てること、その際ヴァンデルンや登山を手段として利用することを女性のヴァンデルンや登山の理由として提示した。これを用いて国民化の時代を乗り切ろうとしたのである。だが、この言説によって本来なら問題とされるはずの山中での性行為は隠蔽され、将来の国民人口の再生産と切り離すことが可能となった。いわば、山は健全な運動の場として捉えられるようになったのである。男性登山家は、後継者となる男性登山家養成を国民育成であると捉えており、国民となる女性の身体は鍛えるに越したことはないとは考えていたが、彼らの視野に女性登山家養成は入っていなかった。また、青年女子についても国民に貢献する女性の準備段階にあると考えられていたために、彼女たちに対する配慮は言説上では示されなかった。このような点から、女性は国民という枠組に入れられたのではあったが、それはあくまで国民形成における有用性という点からの包摂であり、女性の自己実現まで配慮したものではなかったといえる。ここから、男性登山家の意識の深層においてはリベラリズムの国民的枠組、つまり女性はそれ自身として自立していないとみなす階層的排他性が

残存し、それはセクシュアリティの隠蔽となって現れる一方で、子供を産むことでようやく一人前の国民となるという発想をも携えていたと考えられる。また、国民の健康が着目されるようになったため、病人や老人に対する排他性が表面に浮上したことも着目されてよいだろう。

こうして戦間期オーストリアにおける男性労働者登山家たちは、後継者育成のために重要な存在であるとみなした青年を国民へと包摂する過程で、彼らが維持してきた思想をもって矯正しようとする際にリベラルな面が表出し、国民化への抵抗となって現れた。だが、女性の場合には、登山家の後継者としてはみなさなかつたために拘りなく国民化を受け入れた、その行為自体にリベラルな排他性が残存していたといえる。そうした接部に、リベラリズムからナショナリズムへの連続性が見いだせるのである。

脚注

- 1) 戦間期オーストリアにおいては「オーストリア国民」という帰属意識はなく、あくまでも「ドイツ国民」であり、「ドイツ国民」に属するオーストリア人という認識であった。以下の論考を参照のこと〔古川 2018a〕。
- 2) 1905年12月にウィーンでナスタール・アルペン節制連盟が結成されたと紹介されているところから、禁酒をすべきであると主張する人びとがいたことがわかる〔NF 1906:16〕。
- 3) 1913年10月にはドイツ・カッセル郊外のホーエ・マイスナーにてワンダーフォーゲルやブントなどのなど、数々の青年運動のグループが3000名あまり一堂に会した「自由ドイツ青年団」の結成が行われた〔参照、ラカー 1985; 望田/田村 1990; 田村 1996〕。
- 4) 1910年大会における会費割引についての話し合いでも割引料金は男性会員の妻と娘には適用されたが、息子には適用されず、18才になってから本会員として入会させることになっていた〔NF 1903: 22; 1913: 200-203; NF. Protokolle 1910: 14-16; 1913: 8-80〕。
- 5) 労働者の青年による投稿によれば、彼らが工場で厳しい長時間労働をしている間にブルジョワ階級の青年は上の学校に行き、身体強化のためによい空気のもとで休暇を過ごしていることから、肺病予防のためのヴァンデルンの必要性を唱え、大戦前に実現されなかった徒弟の有給休暇実現も訴えた〔NF 1916: 156-157〕。
- 6) 青年労働者の組織化は1890年代始まった読書サークルから1893/4年ウィーン青年労働者協会が、これを母体として1903年にオーストリア青年労働者連盟が設立された。徒弟のための職業訓練の改善や昼間授業の要求、社会主義思想や青年たちの無料相談などを援助するとともに、教養・疾病予防等について講演などを行った。〔Neugebauer, 1975: 29-38, 57-66; Rabinbach 1983: 64〕。
- 7) 1924年度の記録によると、青年ヴァンデルングループは26、会員は約2000名。新入会員は650名、年間遠足は1,421回、延べ18,588名が参加し、1923年度よりも増加し、鉄道運賃割引とウィーン支部からの財政援助によってより多くの遠足ができるようになった。協会のタベ、集会、催事は254回開催され、18,244名の参加があった。そのほか図書室の利用、装備の貸し出しなどが行われた。アジ活動もあり専門学校で成功した、という記録がある。1928年の記録で、アカデミック・ヴァンデルングループの会員は957名、青年ヴァンデルングループ(SAJおよび自由組合加盟者)は、36グループで総勢4600名(男子約3500名、女性約1100名)おり、ヴァンデルンは2347回、のべ32,964名の参加があった。ウィーンのSAJの会員数は1928年の記録で7642名であったところから、SAJ会員の半数程度が自然の友のグループに入っていたことになる〔M. Wien 1925 (3/4):IV; 1929 (3/4): IX-X; 1931 (3/4): IX-X〕。
- 8) 1926年に自由労組徒弟支部青年グループには会員約2600名、自由労組徒弟部の会員数は全体で1925年7000名余、1930年が最大で1.7万人が属した〔Neugebauer, 247; 278-280〕。

- 9) 1908 年アフリツチュ (Anton Afritsch: 1873-1924) によって設立された幼児・学童保育組織。1910 年代には戦間期自然の友の会長となるフォルカートや指導層の一人であったマックス・ヴィンター (Max Winter: 1870-1937) などが代表を務めた。子供の友については以下の文献を参照 [Binder 1983; Rabinbach 1983; Weiss, 2008]。
- 10) 1914 年 8 月第 2 インターナショナルの多数派が戦争に賛成の意を表したのに反対し、中立を標榜していた諸国の社会主義者が集まって 1915 年 9 月にスイスのチンマーヴァルトで開いた会議。戦争反対、民主的平和主義の諸原則を唱えたがその中で左派は最も急進的だった [Braunthal 1961: 28-29; 上条 1990: 74-75]。
- 11) SAJ 会員数は、1918 年 9382 名、1923 年最大となり 37868 名、その後おおよそ 3 万前後を推移した [Neugebauer 1975: 137]。
- 12) 1929 年ウィーンでインターナショナル青年大会が開催された際、自然の友青年グループ約 200 名が幹旋・引率して、期間内に 154 回、延べ 2673 名の青年が参加した [M. Wien 1930 (3/4) IV-V]。
- 13) 1919 年設立、VAS が改組されて 1924 年 ASKÖ となった。
- 14) 1928 年大会報告によれば、自然の友内の登山活動以外の専門グループは、音楽、歌唱、写真、自然科学、フライデンカー、シュプレヒコール、絵画、ボート、ウインターツーリストック、クレッタラー、水泳、エスペラント、洞穴科学、ダンス、演劇となっている [NF. Protokoll 1928: 18]。
- 15) 1928 年サン・モーリッツでの冬季オリンピック大会時に「ドイツ身体運動促進のための医師同盟」が中心となり 11 カ国 33 名の医師によって、国際スポーツ医師連盟が結成された。この連盟は大会実行委員会と協力しながら、競技選手たちの身体測定や身体状況を監督し、以降活動が現在に至るまで続けられている。1928 年以降「スポーツ医」という名称が使われるようになった [Tittel 2004: 317]。
- 16) ハピッシュの F. アードラーへの手紙に日付は入っていないが、1929 年 12 月 12 日付け、リヒター会長から F. アードラーへの手紙に添付されていたものである。同時期の手紙であると考えられる。
- 17) 山地の牧草地にあるアルム小屋は、山農の未婚女性が谷の農場から解放され、監視なしで働ける場所であったため、性的な出会いが期待される機会を提供していた [Hanisch 2019: 171-172]。
- 18) 1900 年の山行記には一カ所、男性登山家が山小屋に住む山農の女性に言い寄る描写が掲載されている [NF 1900: 21]。
- 19) 節酒を促す記事もあったが、管見の限りこの時期にはアルコールは筋肉を弱体化させる、という学会報告のみであった [NF 1899: 21]。アルコール問題についてのアードラーの見解は以下の文献を参照 [Parteivorstand 1924:9-66; Byer 1987; Sandner 1996; 1999]。
- 20) 二重君主国のナショナルイズムを研究したジャドソンは、世紀転換期においてドイツナショナルの団体による言語境界地域へのツアーを私的な旅行を公的なものに結びつけようとしたことを明らかにし、国民化運動の手段とした [Judson 2007: 145]。

参考文献

(刊行史料)

MDÖAV *Mitteilungen des Deutschen und Österreichischen Alpenvereins*.

M. Wien *Mitteilungen der Ortsgruppe Wien, Beilage zum „Naturfreund“*.

NF „Der Naturfreund“. *Mitteilungen des Touristen-Vereins „Die Naturfreunde“*.

ÖAZ *Österreichische Alpen Zeitung*.

NF Anträge NF Anträge für den IX Konferenz zu Leipzig, 1923 für den IX Konferenz zu Leipzig, 1923.

NF Protokoll Protokoll der VI. Hauptversammlung des Naturfreundes, zu Steyr, 15.-16. Mai 1910.

Protokoll der VII. Hauptversammlung des Naturfreundes, zu München, 11. und 12. Mai, 1913.

Protokoll der X. Hauptversammlung des Naturfreundes, zu Wien, 4. -6. Juli, 1925..

Protokoll der XI. Hauptversammlung des Naturfreundes, zu Zürich, 17. - 19. August, 1928.

Protokoll der XII. Hauptversammlung des Naturfreundes, zu Bregenz, 4. und 5. August, 1932.

(未刊行史料)

Happish, Leopold 1929 A Letter to F. Adler from Leopold Happisch, in *Sozialistische Arbeiterinternationale*,

2953/9, in: Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis, Amsterdam, the Netherlands.
Happisch, Leopold 1970 *Geschichte der Naturfreunde. Zeitraum 1895-1933/34*, Wien, Maschinschrift.

(同時代文献)

Fletscher, Walter Morley 1933 Obituary Notice, in: *Biochem Journal*, 27-5: 1333-1336.

(論文・著作)

- 田村栄子 1996 『若き教養市民層とナチズム—ドイツ青年-学生運動の思想の社会史』, 名古屋大学出版会.
古川高子 2014 「大衆政治化期オーストリアにおけるリベラル・ツーリズムの展開」『東欧史研究』36, 3-25.
——— 2018a 「戦間期オーストリアにおけるナショナルツーリズム—E. ビヒルの思想と活動から」
『現代史研究』64, 1-17.
——— 2018b 「「赤いウィーン」の自然思想—自然の友によるカラロとの断絶を問う」, 『東京外国語大学
論集』97, 58-82.
望田幸男/田村栄子 1990 『ハーケンクロイツに生きる若きエリートたち 青年・学校・ナチズム』, 有斐閣
選書.
ウォルター・ラカー (西村稔訳) 1985 『ドイツ青年運動 ワンダーフォーゲルからナチズムへ』, 人文書院.
Bader-Zaar, Brigitta 1996 *Women in Austrian Politics, 1890-1934, Goals and Visions*, in: David F.
Good/Margarete Grandner/Marz Jo Maynes (eds.), *Austrian Women in the Nineteenth and Twentieth
Centuries*, Providence/Oxford, Berghahn Book, 59-90. Binder, Jakob (Hg.) 1983 *75 Jahre Kinderfreunde
1908-1983. Skizzen, Erinnerungen, Berichte, Ausblicke*, Wien/München, Verlag Jungbrunnen.
Braunthal, Julius 1961 *Otto Bauer. Eine Auswahl aus seinem Lebenswerk*, Wien, Verlag der Wiener
Volksbuchhandlung. (=上条勇邦訳 1990 『社会主義への第三の道 オットー・パウアーとオーストロ・
マルクス主義』, 梓出版社)
Byer, Doris 1987 *Sexualität Macht Wohlfahrt. Zeitgemässe Erinnerungen an das „Rote Wien“*, in:
Zeitgeschichte, 14-11/12: 442-463.
——— 1988 *Rassenhygiene und Wohlfahrtspflege. Zur Entstehung eines sozialdemokratischen
Machtdispositivs in Österreich bis 1934* Frankfurt am Main, Campus Verlag GmbH.
Grimm, Jacob o. J. *Weisthumer*, o. S.
https://archive.org/stream/weisthmergesam01grim/weisthmergesam01grim_djvu.txt(access,
2019/05/09).
Günther, Dagmar 1998 *Alpine Quergänge. Kulturgeschichte des bürgerlichen Alpnismus (1870-1930)*,
Frankfurt a.M./New York, Campus Verlag.
Halbritte, Roland 2002 »Wie reist frau in Oberbayern und Tirol!«. Reisende Frauen in den Alpen und ihre
Wahrnehmung des Gebirges am Beispiel einer Reisebeschreibung aus dem Jahre 1911, in: Kurt
Luger/Franz Rest (Hg.), *Der Alpentourismus. Entwicklungspotenziale im Spannungsfeld von Kultur, Ökonomie
und Ökologie*, Innsbruck/Wien/München/Bozen, Studien Verlag, 143-170.
Hanisch, Ernst 2019 *Landschaft und Identität. Versuch einer Österreichischen Erfahrungsgeschichte*,
Wien/Köln/Weimar, Böhlau Verlag.
Harbermas, Jürgen 1980 *Die Moderne - ein unvollendetes Projekt*, in: ders., 1990 *Die Moderne - ein
unvollendetes Projekt. Philosophisch-politische Aufsätze 1977-1990*, Leipzig, Reclam Verlag, 32-54 (=三島憲
一編訳 2000 『近代 未完のプロジェクト』, 岩波現代文庫, 4-45).
Judson, Pieter M. 1994 *Deutschnationale Politik und Geschlecht in Österreich 1880-1900*, in: David
Good/Margarete Grandner/Mary Jo Maynes (Hg.), *Frauen in Österreich. Beiträge zu ihrer Situation
im 19. und 20. Jahrhundert*, Wien/Köln/Weimar, Böhlau Verlag, 32-47.
——— 1995 "Not Another Square Foot!" German Liberalism and the Rhetoric of National Ownership in
Nineteenth-Century Austria, in: *Austrian History Yearbook* 26, 83-97.
——— 1996 *Exclusive Revolutionaries. Liberal Politics, social Experience, and National Identity in the*

- Austrian Empire, 1848-1914*, Ann Arbor, The University of Michigan Press.
- 2007 *Guardians of the Nations: Activists on the Language Frontiers of Imperial Austria*, Cambridge, MA/London, Harvard University Press.
- Konrad, Helmut 2008 Das Rote Wien. Ein Konzept für eine moderne Großstadt? , in: Helmut Konrad /Wolfgang Maderthaner, (Hg.), ...*der Rest ist Österreich. Das Werden der Ersten Republik*, Band I, Wien, Carl Gerold's Sohn Verlagsbuchhandlung KG, 223-240.
- Konrad, Helmut/ Wolfgang Maderthaner 2008 Editorische Vorbemerkung, in: ...*der Rest Österreich*, 13-20.
- McEwen, Britta I. 2010 Welfare and Eugenics: Julius Tandler's Rassenhyginische Vision for Interwar Vienna, in: *Austrian History Yearbook* 41, 170-190.
- 2012 *Sexual Knowledge. Feeling, Fact and Social Reform in Vienna, 1900-1934*, New York/Oxford, Berghahn Books.
- Mesner, Maria 2007 Educating Reasonable Lovers: Sex Counseling in Austria in the First Half of the Twentieth Century, in: Günther Bischof/Anton Pelinka/Dagmar Herzog (eds.), *Sexuality in Austria. Contemporary Austrian Studies*, Vol. 15, New Brunswick/London, Transaction Publishers, 48-64.
- Neugebauer, Wolfgang 1975 *Bauvolk der kommenden Welt. Geschichte der sozialistischen Jugendbewegung in Österreich*, Wien, Europaverlag.
- Partei Vorstand der Sozialdemokratischen Arbeiterpartei Deutschösterreichisches (Hg.) 1924 *Victor Adlers Aufsätze, Reden und Briefe*, 3. Heft, Wien, Verlag der Wiener Volksbuchhandlung.
- Rabinbach, Anson 1983 *The Crisis of Austrian Socialism: From Red Vienna to Civil War, 1927-1934*, Chicago/London, The University of Chicago Press.
- Sandner, Günther 1996 Zwischen proletarische Avangarde und Wanderverein. Theoretische Diskurse und social Praxen der Naturfreundbewegung in Österreich und Deutschland (1895-1933/34), in: *Zeit Geschichte*, 23-9/10: 306-318.
- 1999 *Die Natur und ihr Gegenteil. Politische Diskurse der sozialdemokratischen Kulturbewegung bis 1933/34*, Frankfurt am Main, Peter Lang GmbH.
- Schmid-Mummert, Ingeborg 2011 Alltagstelegramme, in: Der Deutsche Alpenverein, der Österreichische Alpenverein u. der Alpenverein Südtirol (Hg.), *Berg Heil! Alpenverein und Bergsteigen 1918-1945*, Wien/Köln/Weimar, Böhlau, 17-74.
- Tittel, Kurt 2004 Leistungen Deutschlands für die internationale Sportmedizin. Historische Reminiszenzen, in: *Deutsche Zeitschrift für Sportmedizin*, 55-12: 315-321.
- Weiss, Hans 2008 *Das Rote Schönbrunn. Der Schönbrunner Kreis und die Reformpädagogik der Schönbrunner Schule*, Wien, echomedia buchverlag.
- Tara Zahra, Imagined Noncommunities: National Indifference as a Category of Analysis, in: *Slavic Review. Interdisciplinary Quarterly of Russian, Eurasian, and East European Studies*, 2010, 69 (1): 93-119.